

[道 徳]

体験と授業をスパイラルに仕組む道德教育の実践

桑原 由加*

1 はじめに

小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度から、「特別の教科 道德」が全面実施される。教科化を目前に控え、どのような授業を実践すれば子供の道德性を養うことができるのか、道德の授業改善が注目されている。

道德の授業改善の方向性を、諸富 (2015) は次のように示している。「『道徳的価値を教える』という『内容モデル』『内面主義』の発想にとどまらず、それを大切にしながらも、さらにそれを含んで超えて『道徳的資質・能力を育てるモデル』の発想に立つ授業が行われるように変わっていかなくてはならない。」ここでは、道德性を、従来のように道徳的価値を内面にもつだけでなく、その価値を生きて働かせる能力まで高まった状態として捉えている。

このような道德性を養っていくためには、私は、授業改善とともに、教育活動全体を通して道德性を養う道德教育の改善にも着目しなくてはならないと考える。

道德の授業と体験活動は、教育活動の中でそれぞれ別に設定されている。そこでは、道德の授業で養われた道德性も、体験活動で養われた道德性も点としてしか存在しない。私達教師は、子供の中で養われた道德性の点と点がつながっていくであろうと期待する。しかし、それは、子供の個性や経験によって個人差があり、明確ではない。

道德性の点と点を結ぶために道德教育が存在する。しかし、道德教育の理念や重要性は示されてきたが、点と点とを結ぶ具体的な実践方法は明らかではなかった。そこで、道德教育の具体的な実践方法を次のように考えた。

子供の心は、体験活動を通して動くはずである。この心の動きを1つの点とする。この心の動きが道徳的価値の自覚になるように手立てを講じ支援することで、体験と価値が結びつき1つのサイクルができる。しかし、1つのサイクルだけでは価値の自覚の深化にはつながらない。そこで、サイクルを繰り返してスパイラルになるように活動を仕組む。

子供は、道德の授業で感じたり考えたりして心を動かし、価値の自覚を深めていく。この道德の授業も1つのサイクルの中に入る。そして、体験活動のサイクルと道德の授業をスパイラルに仕組んだ、ダイナミックな道德教育を計画し実践していく。

このようなダイナミックな道德教育を実践することで、子供が道徳的価値を内面にもち、それを生きて働かせる能力に高めるまで、教師はしっかりと見取り支援することができる。今求められている、価値を生きて働かせる道德性を養うことができるのではないかと考えた。

2 研究の目的

本研究では、体験活動と道德の授業を関連させ道德教育をスパイラルに仕組むことによって、子供の道德性がより豊かに深化することを、実践を通して検証する。

3 研究の方法

- (1) 対象 小学校4学年児童 (男子37名 女子35名)
- (2) 実施期間 平成26年6月～平成27年1月
- (3) 検証方法

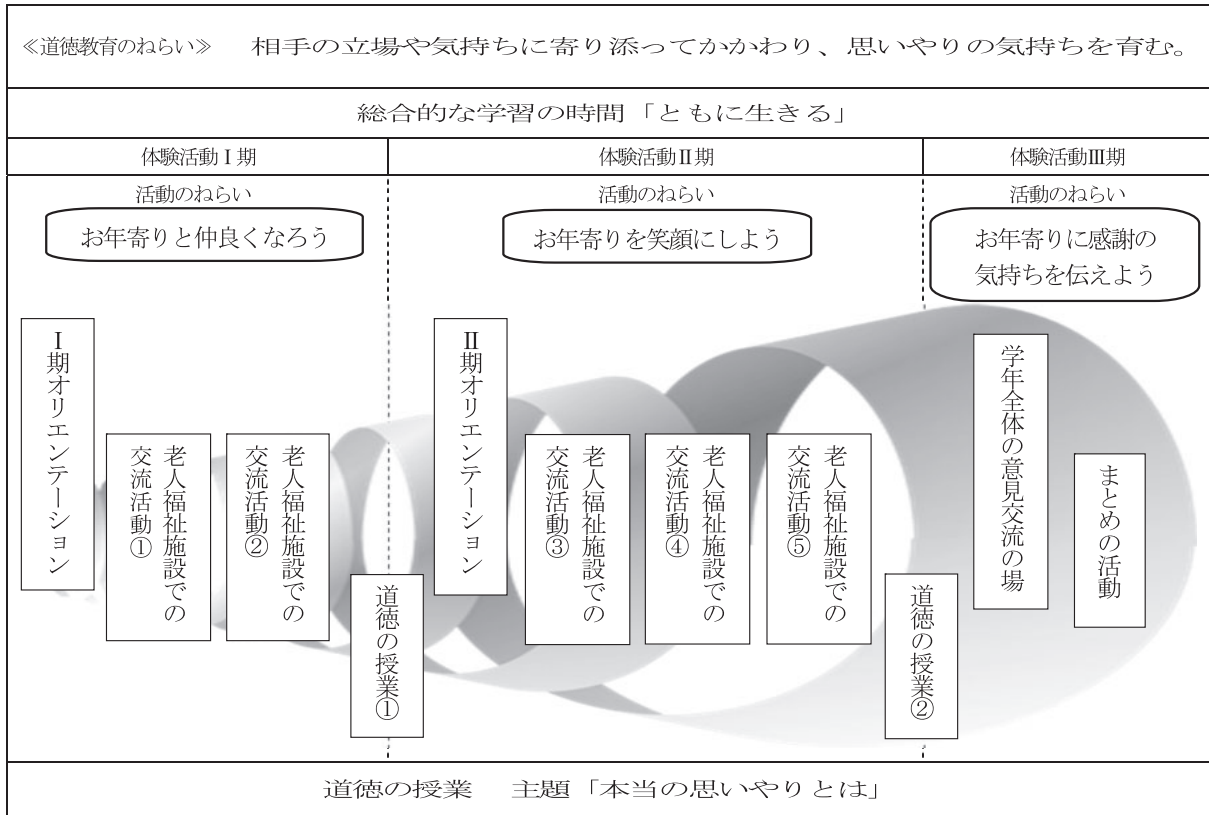
老人福祉施設での交流体験活動と「本当の思いやりとは」を主題にした道德の授業を関連させて、道德教育をスパイラルに仕組み実践していくことを通して、子供の「思いやり」の価値の自覚が深化していくかどうかを、子供の振り返り作文と活動の様子から検証する。

* 南魚沼市立六日町小学校

4 実践の概要

(1) 実践する道徳教育の全体像

体験活動と道徳の授業を関連させ、「思いやり」の価値を深める道徳教育を次図のように実践した。



(2) ねらいとする道徳的価値について

道徳教育の視点から捉えると、人やものとのかかわりを通して学習のねらいを達成することを目指す体験活動は、他の人とのかかわりに関する価値や、集団や社会とのかかわりに関する価値が内包されていると言える。

本実践の体験活動である老人福祉施設での交流活動も、同様である。この活動に内包される価値を、道徳の内容項目として挙げると、「2 主として他の人とのかかわりに関すること」の「(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。」「(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。」「(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。」の3項目である。その中でも、本実践で最も大事にしたい価値は、「(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。」である。それは、4年生という時期の子供の実態と課題について、次のように考えているからである。

4年生の子供に「思いやり」の定義を問うと、「困っている人を助けること」という素直な答えが返ってくる。しかし、「思いやり」はともすると、自分本位のものになってしまいがちで、行き過ぎると親切の押し売りになってしまうこともある。実際の生活場面でも、人間関係作りにおけるトラブルは、自分がよかれと思ってした行動が友達に受け入れられないことが要因となって起きることがある。こうしたトラブルがしっかりと解決できない場合、「いじめ」に発展してしまう場合もある。

また、4年生は、人間関係を一層深め、よりよく他者とかわることが必要となってくる時期である。だからこそ、自分本位でなく相手の状況や気持ちを察した上で行動していくことが「本当の思いやり」であることに気付き、「思いやり」の道徳的価値の理解を深めていくことが必要である。

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（2015）には、「B 主として人との関わりに関すること」の中学年以上の内容項目に、「相互理解・寛容」として「(10) 自分の考え意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること」が追加されている。このことから、相手の状況を考えて相手の気持ちに寄り添うところまで「思いやり」の価値の自覚を深め、生きて働かせる能力となるように、道徳性を養っていかなくてはならないと考える。

そこで、本実践では、「相手の現在の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによっ

て相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるように」なることを重点項目とする。年齢も置かれた状況も感じ方も異なるお年寄りと交流し、「思いやり」の価値の理解を深めていくことは、4年生の子供にとって大変意義深いことである。

(3) 豊かな体験活動にするための工夫

学区にある老人福祉施設には、デーサービスを利用しているお年寄りもいれば、宿泊し介護が必要なお年寄りもいる。お年寄りと交流する中では、お年寄りにとってよかれと思ってしたことが迷惑がられたり、逆に意図せずにしたことに対して感謝されたりと、4年生の子供にとって予想を超えた反応が返ってくる可能性がある。こうしたかかわりが、「本当の思いやりとはどんなものなのか」を考える契機となるはずである。お年寄りとの交流が深まっていけば、「思いやり」の価値にとどまらず、お年寄りに対して「感謝」や「尊敬」の気持ちをもつ子もいるかもしれない。核家族が多い子供の実態からしても、お年寄りとの交流そのものが貴重な体験活動となる。

この活動を更に豊かなものにするために、次の視点からも工夫を加えて計画・実践した。

① 長期間・継続的・発展的な活動のためのスパイラルな仕組み

道徳性は急速に養われるものではない。見たり聞いたり実際にやってみたりしたことが、心にしっかりと受け止められ、心の中で十分に咀嚼されなければ、道徳的価値の自覚の深化には至らない。そして、体験と心の動きのサイクルが繰り返されることが必要である。また、そのサイクルは、短期間でなくより長期間で行うものである方が、確実に道徳性が養われると考えた。

そこで、サイクルの連続を6月から1月までの8か月間という長いスパンに設定し、スパイラルに体験活動を仕組んだ。「ともに生きる」をテーマに、活動Ⅰ期のねらいを「お年寄りとうまくやろう」Ⅱ期のねらいを「お年寄りを笑顔にしよう」Ⅲ期のねらいを「お年寄りに感謝の気持ちを伝えよう」として、活動を計画した。

活動後には、心の動きを自覚するために振り返り作文を書く時間を設定し、自分自身で体験したことや感じたことを明確に持たせるようにした。そして、感じたことを手がかりに次の交流計画について考える時間も確実に設定した。繰り返しのマンネリ化に陥ることなく、子供の思いを基に発展的に活動できるように配慮した。

② 少人数グループによる活動

お年寄り顔と顔を近づけて接し、言葉のない高齢のお年寄りの表情のふとした変化を感じてかかわってほしいと願い、お年寄り10人程度が生活する1つのユニットに男女混合4～5人のグループを割り当て、一人一人が主体的にお年寄りとかかわることができるようにした。

③ 客観的に考える視点を持たせる場の設定

交流活動を繰り返していくと、「子供たちの思い」だけで活動が進んでしまいがちである。自分本位な交流活動になってしまい、ねらいとする「相手の状況や気持ちを考えた思いやり」にはつながらない場合もあることが予想される。ねらいとする「思いやり」の道徳的価値の理解を深めていくためには、これで良いのかと自問自答する場が必要である。

そこで、お年寄りとの交流を考える客観的視点をもたせる場を設定した。それが、「実践する道徳教育の全体像」図に示した「オリエンテーション」である。

㊦ Ⅰ期オリエンテーション

活動を始める前に、老人福祉施設で実際に働く職員をゲストティーチャーに招き、お年寄りの様子や、施設で働く職員の仕事、思いと願いを知る場を設けた。実際に働く人から教えてもらうことで、教師が同じ内容を伝えるよりも、施設のお年寄りの様子や施設職員の仕事の様子を共感的に受け止め、今後の交流活動に対する具体的な見通しをもつことができた。

㊧ Ⅱ期オリエンテーション

Ⅱ期の活動に入る前に、他校の子供たちが老人福祉施設で行った交流の様子を描いた映像資料を視聴し、それまでの交流活動を振り返る場を設けた。子供たちはⅠ期の体験活動でお年寄りとの交流のよさと大変さを実感していたので、映像資料の中の子供たちの思いや行動を、自分のこれまでの体験や思いと比較し、自分ごととして受け止めていた。そして、Ⅱ期の交流を始めるに当たっての目標をもつことができた。

(4) 関連させる道徳授業の工夫

体験活動を通し、一人一人の心の中で「思いやり」は育まれていく。しかし、体験を通して育まれる道徳的価値の理解の深さは、子供のこれまでの心の発達によって異なるものである。そこで、道徳の授業でも「思いやり」の価値を取

り上げて学習する。道徳の授業で学習することで、体験活動の中だけでは個人差のある価値の実感がより深まっていくと考えた。

① 実践する時期

体験活動と道徳の授業を関連させて実践する際には、「道徳の授業は、各教育活動において行われる道徳教育を、全体にわたって調和的に補充・深化・統合する時間である」（小学校学習指導要領解説道徳編 2008 P.29～30）ので、道徳の授業を単に体験活動をよりよくするための事前指導にしてはならない。

そこで、実践にふさわしい時期を考慮した。Ⅱ期の交流活動が始まる前の9月初旬と、Ⅲ期の活動に入る前の1月初旬に、道徳の授業を設定した。1回目の道徳の授業は、Ⅰ期の活動スパイラルでの道徳教育の補充・深化・統合を、2回目の道徳の授業は、Ⅱ期の活動スパイラルでの道徳教育の補充・深化・統合を目的とする。このように時期を考慮することで、道徳教育の要となる道徳の授業になり得ると考えた。

② 児童の振り返り作文の引用

道徳の授業を、体験活動をよりよくするための手段のようにしてはならないが、体験活動との関連付けは必要である。

そこで、体験活動の振り返り作文の中から、お年寄りの立場を考えたり、お年寄りの気持ちに寄り添って行動しようとしたりしていることが読み取れる記述文を引用して、授業の導入を行った。教師が抜粋した文章を読み聞かせるだけだが、子供にこれまでの交流活動での体験を想起させることができ、関連付けを行うことができた。

③ 資料の選定と吟味

道徳の授業は、どちらも「本当の思いやりとは」を主題にし、この主題に適した資料を用いた。体験活動でも、お年寄りとの自分のかかわりを自問・自答させる場面を設定しているが、道徳の授業でも、「思いやり」の価値について、自問・自答させる場面を設定した。主人公の置かれた状況や葛藤する気持ちが体験活動と重なる資料として、下表の資料を選定し、道徳の授業を構成した。

	資料	資料の概要	授業の概要
道徳の授業①	温かい言葉	お兄さんは、足をけがしながらも懸命に階段を上ろうとする男の子を見かけ、手伝おうと声を掛けるが、男の子に断られる。お兄さんは男の子の「自分で上りたい」という気持ちを汲み取り、「ごめんね」と謝る。それに対して、男の子は「ありがとう。」と返す。 二人のやりとりを見ていた主人公「ぼく」の心は動かされる。 (学研「みんなのどうとく」4年)	導入 ・思いやりのある人とは、どんな人でしょう。 引用した振り返り文 ・「大事にしたいのはお年寄りのことを考えてあげることです。お年寄りに同じことを何度聞かれても、丁寧に答えることです。」 主発問 ○お兄さんが男の子に謝ったのはなぜでしょう。「ごめんよ。」と言ったときのお兄さんの気持ちを考えましょう。 終末の振り返り ・本当の思いやりとは、どんなことでしょうか。
道徳の授業②	心と心の握手	主人公の「ぼく」は荷物を重そうに持つおばあさんに、手伝おうと声を掛けるが断られてしまう。後で、おばあさんは自力でしっかりと歩くことができるように練習していたことを知る。 数日後、またおばあさんを見かけた「ぼく」は、今度は声を掛けずに、おばあさんの後ろをついていく。そして、自宅まで歩き切り、笑顔になったおばあさんを見守る。 (文部科学省「私たちの道徳」中学年)	導入 ・親切にされてうれしかったことはありますか。 引用した振り返り文 ・「お年寄りとゲームをするのもいいけど、一緒に話をするのがいいと思いました。一緒に話をするとお互いの気持ちが分かって楽しくなるからです。」 主発問 ○（資料前半のみ読み聞かせて）おばあさんをまた見かけたぼくは、その後どうしたでしょうか。 終末の振り返り ・本当の親切とは、どんなことなのでしょう。

(5) 道徳的価値の自覚を促す振り返り作文

体験や授業に伴う心の動きは、言語化することによって整理され、自覚されて深化する。従って、言語化する活動は、道徳的価値の自覚の深化には欠かすことができない。そこで、体験活動後と道徳の授業終末には、学校共通の振り返りシートを活用し、子供が振り返り作文を書く時間を設定した。体験活動後の振り返り作文は、自由に思いのままに書かせたが、道徳の授業終末の振り返り作文は、道徳の授業そのものの評価も兼ねているので、視点を与えて書かせた。

そして、教師は、振り返り作文を共感的な立場から読み取り、子供の道徳性の自覚や深化を見取っていった。子供の

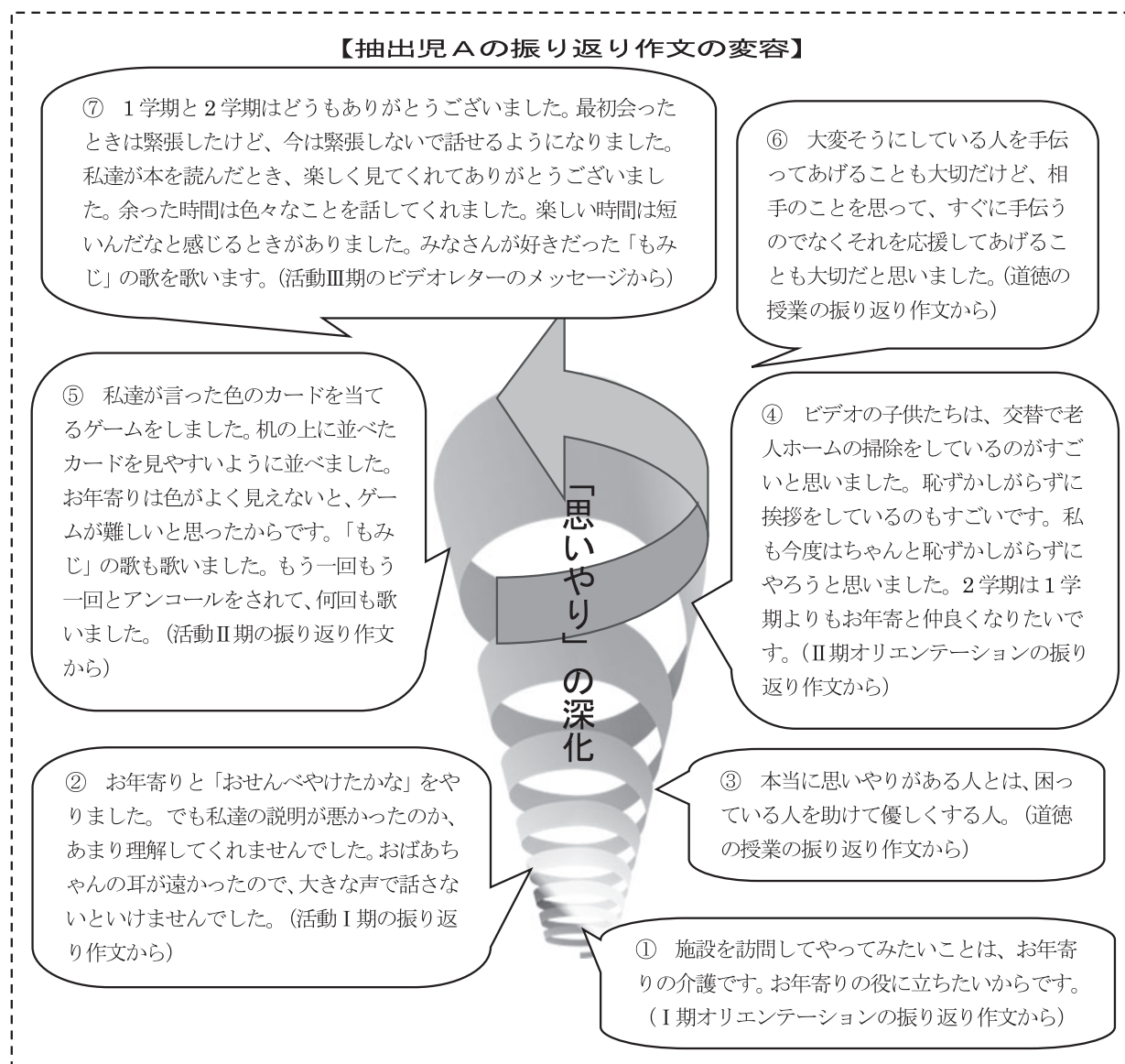
心の変容は外面だけでは分からないことも多い。振り返り作文は、子供の内面の変容を見取るのに大変有効であった。

また、教師が読んで共感した振り返り作文や、その子自身の心の成長が読み取れた振り返り作文を、学級朝会で紹介したり、教室に掲示したりして、子供が互いの道徳性の伸長を認め合う場も設定した。このように、振り返り作文を、子供の自己評価や教師の子供評価だけでなく、子供同士の相互評価にも活用した。

5 考察

(1) 振り返り作文から

子供の振り返り作文を読んでいくと、どの子にも道徳性の深化が感じられた。下図は、抽出児Aが書いた振り返り作文の一部を並べたものである。始めは、お年寄りに対しての理解が浅く、お年寄りとの距離が感じられる文章表現が、体験や授業のサイクルを重ねていくにつれて、お年寄りへの理解が深まり、お年寄りとの距離が縮まっていったことが読み取れる文章に変容している。「思いやり」の価値がスパイラルに深化していく様子を見取ることができる。



(2) 交流活動の準備の様子から

活動Ⅰ期では、お年寄りとの交流で自分たちのやりたいことを準備しているグループが多かった。まだ自分本位の「思いやり」である。

しかし、活動Ⅱ期になると、どのグループもお年寄りが楽しめるものは何か考え準備していた。お年寄りが喜ぶことが自分の喜びになると感じて、活動していたと見取る。相手の気持ちに寄り添った「思いやり」である。

そして、活動Ⅲ期では、学年全体でまとめの活動として何をすべきなのか話し合った。まとめの活動目標を「お年寄りをこれまで以上の笑顔にする」「これまでの感謝の気持ちを伝える」「お年寄りにとって思い出に残るものにする」と決めて、具体的には何をしたらよいのか考えていった。インフルエンザの流行があり施設訪問ができなかったため、話し合いの末、ビデオレターとお礼のカードを活動グループごとに作り、老人福祉施設に贈ることに決定した。

こうした様子から、子供たちが、「思いやり」の道徳性を、道徳的価値を内面にもつだけでなくその価値を生きて働かせる能力まで高めていったと見取る。

(3) スパイラルに仕組む道徳教育の成果と課題

① 成果

人にとって、日々の生活そのものが体験であり、生活の中で人は感じ考え、よりよく人とかわりよりよく自分の良さを発揮したいと願い、次の体験にそれを生かして生きていく。生きていくことは、正に、体験と考えることのスパイラルであり、生きていく中で人は成長していく。しかし、感じ考えることを止めたとき、人の成長はそこで止まる。

感じ考え続けることは、道徳性を深化させることにつながる。道徳教育の目標は、感じることを考えることを止めずに、生涯を通じて心を成長させていく人間を育てることであると考えられる。

抽出児Aの振り返り作文や子供たちの活動の様子の変容から、本実践を通して、子供の道徳性は体験とともにスパイラルに深化したと言える。体験活動と道徳の授業を関連させて道徳教育をスパイラルに仕組むことによって、人が生きて成長していく過程を教育活動の中に再現できたと考える。

また、体験とそれに伴う心の動きを1つのサイクルとして学習したことで、感じ考えることを、子供に習慣化することができた。生涯を通じて成長していくためのスキルを身に付けさせる一助となったと考える。

道徳教育をスパイラルに仕組んだ本実践は、道徳教育の目標を達成できる有効な手立ての1つであると言える。

② 課題

課題の1つは、道徳教育をスパイラルに仕組むには、道徳教育の計画に賛同し、体験活動を豊かに実践するための協力者が必要だということである。

本実践では、幸いにも、同じ学年を担当する職員や老人福祉施設職員の協力を得ることができた。交流活動を始める前に話し合いの場をもち、学年内や学校・施設間で交流活動の意義を共有することで、ねらいに合致した実践が可能になった。

2つは、道徳教育における子供の心の成長の見取りの難しさである。心の成長を、学力や体力のように数値で表すことは難しく、ふさわしくない。したがって、成長の見取りは、教師の主観に拠る。教師自身の感じ方や考え方によって、子供の見取りは変わる。道徳教育において、教師がしっかりと子供の成長を見取り、よりよい成長ができるように支援するには、教師も感じ考えることを止めずに自問・自答していく態度が大切である。

本実践では、子供の見取りに迷いがなかったわけではない。しかし、同じ学年を担当する職員と活発に意見交流することで子供を見る視点を共有のものにし、より客観的な見取りができたと考える。

6 おわりに

子供の道徳性は、短期間に劇的には養われない。時には、道徳性の深化のスパイラルが上り坂にならずに、同じ位置でサイクルを描くこともある。けれども、私達はあきらめずに実践し、子供の小さな成長を認め支援していくことが、道徳教育にとって何より大切であると実感している。

【引用・参考文献】

- ・ 諸富祥彦 『「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業』(2015 図書文化社)
- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 道徳編』(2008)
- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(2015)